

芹沢光治良とジャック・シャルマン Ⅱ 芹沢文学の最大の謎Ⅱ

芹沢文学講話⑤「芹沢光治良の留学・闘病の謎」に、フランスのエーン県オートヴィルのホテル・レジナで四人一緒に闘病したジャック・シャルマンのことも少し書きました。芹沢光治良の晩年に連作として創作した「神の書」「天の書」注／全九巻が未完に終わり、没後に全八巻が「神と人間」と総称されて新潮社から出版されているは、天才的な科学者で人類の月上陸を予言したり、「大自然の唯一の神」を説き、芹沢光治良に作家に成ることを勧めたジャック・シャルマンのことを回想して書き残すためであったとも言えるのです……。

ところが、この闘病の日々を自伝的に創作した三部作の『離愁』には、同一の食卓につく者として「四人のフランスの大学生の卓子」に頼み、「パリ大学のブルデル君は大彫刻家の甥で、代議士の息子、グルノーブル大学のロシー君はニームの銀行家の息子、ノルシ君はポアチエの工芸家の息子であるが、みな法律を学んでいた。」とあり、モリス・ロシー、ジャン・ブルデル、ノルシの三人で、「ここにはジャック・シャルマンのことは全く書かれていません。このオートヴィルのホテル・レジナでは、夫人の見舞いで滞在していた小説家ケツセルやフランス語の添削をしてくれたフーベル夫人とも親交をしたのです。

「私『芹沢光治良』の妻A子は、日本に帰国せずに度々ホテル・レジナを訪ねて来ます。ケツセルは、高原療養所の体験を小説に書き、私に共作をしようと誘い、作家に成ることを勧めました。夫人はスイスのダボスへ移り、ケツセルは去りました。フーベル夫人も主人を迎えに来てパリに帰ります。モリスやジャンも許可が出て、半世紀後に再会を誓ってニームやパリに戻りました。「私」もオートヴィルで約7ヶ月間闘病して、牧場に桜草が咲き誇る春に、デュマレ博士の許可が出て、学友のメルシエ君とリヨンに滞在し、デイジョンのメルシエ君の家を訪ねました。パリに帰り、6月に佐伯祐三画伯を見舞います。夏をユリアージュ温泉の寒村で避暑し、11月上旬のフランス船プラン号で帰国したのです。結核が再発して、スイスのレーザンで闘病はしないのです。この三部作は自伝的ですが創作であり、ジャック・シャルマンとは闘病はしなかったとは言えないのです。帰国の年も、どうしてか昭和4年11月と記憶違いするのです。

『故国』には、「六年ぶり」「僅か六年であった」と書いて、芹沢光治良のパリ留学通りではないのです。帰路に上海で、陳君やルクリュに案内されて現代支那文学の大家ロジユンに会ったのは「魯迅」であるか不明です。そして、「私」は日本に居られず、ルクリュウの北京へ旅立つと言うのも自伝ではありません。昭和30(1955)年に発行された最初の自伝『神と死と言と』には、オートビルの高原サナトリウムに入院したが、「そこで療養するかたわら、ほんとうに生とは何ぞやと必死に求めた日々のは、《孤絶》と《離愁》という二篇の長篇小説に詳しく書いたから、今更此処に述べるまでもない。」と闘病战友のことは書かれていません。ここで、若い作家ケツセルに会い、親交しました。デュマレ博士の許可で、イタリーやギリシャの旅を敢行したとも書いています。

昭和42(1967)年に発行された第二の自伝『私の青春時代』には、生年を明治30年「戸籍は明治29年」と書き、大正14年にパリに留学し、結核に罹り「それから一年余も、スイスのレーザンやコーやフランスのオートビル等、千米以上の高原療養所で、死と闘う生活をした。」と書き、ケツセルとの交流は書いていますが、闘病战友のことは書かれていません。

昭和52(1977)年に書かれた第三の自伝『捨たか雑草のように』には、「私は大いに出たばかりの二人の若い人の食卓につくことになった」「二人との交遊」「一人は大彫刻家ブルデルの甥で詩人を志していたが、差し当たり田舎の中学校の教師をするときめていた」とモリスとジャンの二人のみでジャック・シャルマンのことは全く書かれていません。「私は半年後、オート・ビルからスイスのレーザンの療養所に移った」「雪になる直前にアルプスを仰ぐレーザンのV博士の療養所へ行った」とスイスの療養所でも闘病したと書かれています。

オートヴィルのホテル・レジナで共に闘病した四人は、四半世紀(25年)後に再会しようという約束があったようですが、戦後の昭和26(1951)年にスイスのローザンヌで開催された国際ペン大会に参加した後に、パリに3ヶ月滞在しました。この時の体験で書いた長編小説『新しいパリ』に、「高原結核都市オートビルに、ボナフェ博士を訪ねて、もとい療養所で数日すごして、パリにもどった」と書いていますが、三人の闘病战友のことは何も書かれていません。

ところが、昭和55(1980)年秋季(ひるば)に発表した随筆『死んだはずの若い日の友が生きていた』に、「五月はじめ」と書き始め、フランス大使館から電話が

あり、「一九二七年(昭和二年)の冬を、エーランドのオートヴィルのホテル・レジナとともに過ごした」モリス・ルツシーからの手紙が、突然に届きました。「境遇と病状との似たような四人を二組」として過ごしたモリスですが、「このモリス・ルツシーと、ジャン・ブルードルと、ジャック・シャルマンと四人で一組をなした。モリスはニームの商業会議所長の独り息子で、ポアチエ大学で経営学を、ジャンは大彫刻家ブルードルの甥で、ソルボンヌ大学で歴史学を、ジャックはパリの理科大学で理論物理学と天文学を勉強していた。」と書いて、初めてジャック・シャルマンを紹介しました。「一九二七年から八年の冬にかけて」の冬は春の間違い。返事には「夢かと驚き喜んだこと、雪にうもれたあの数カ月は忘れるどころか、私の心に生きつづけたこと」等を書いて「生きたしるし」をモリスに書き送り、「歓喜にあふれた返事」をもらいました。電話でしらされたパリのブルードルからも手紙が届きました。「私は二人にジャック・シャルマンを探し出すように書こうと考えた」と書かれ、ジャックを回想し、「大宇宙を創造した神」「遠からず人間も月に行けること」と書き、「彼が生きているのか、どんな偉大な学者になつているのか」と考えます。冬季の随筆『美しい朴の葉がまた散った』には、「便りのないジャックのことは、暇さえあれば思い出した。」「私はジャックを探してくれるように、ジャンとモリスに頼んだ」と書いています。昭和56(2011)年春季の随筆『孤独な老耄』には「若い予言者のようだった天才科学者」はどうなったか心配していたら、モリスからの手紙に「ジャックは君が考えたように、やはり戦争中にアメリカに逃れて、研究をつづけて世界的な学者になり、ノーベル物理学賞を受けて、現在は父の国に住んでいるようだ。」とあり、一週間後の速達に「今パリのジャン・ブルードルから電話があった。ジャックの住所が判つたので、国際電話した処、夫人が出て、彼が三年前に亡くなったと知らされた。一九六七年にオランダに帰つたが、翌年直ぐにオートヴィルを訪ねるほど、雪のなかの半年の闘病生活を大切な思い出にして、同伴の三人の戦友のことも、しばしば夫人に語り、当時の日誌や随想も保存してあるが、……」と書かれていて、ジャックが三年前にオランダで亡くなつていたことが知らされます。秋季の随筆『私もガン病棟より遠くならなければ』に「家内「芹沢夫人」が入院する前のメモ用紙に「オートヴィルの天文学者が話した、大宇宙を動かしている偉大な力の愛を、私も信じて、絶望しません」と書いています。文字さんが「あのノーベル賞受

賞のジャック先生のお話しをしましたが——」とも書いています。金江夫人は昭和57(2012)年2月に舌癌で死去しました。金江夫人や三女の文字さんも天才ジャックのことを自覚し、話していたのです。

昭和60(2015)年に書いた第四の自伝『わが青春』には、オートビルのホテル・レジナでの「三人の戦友は、ソルボンヌ大学の歴史科三年生のジャン・ブルードルとポアチエ大学の経済三年生のモリス・ルツシーとパリ理科大学の研究室のジャック・シャルマンで、班長格は天才ジャックだった。」とジャック・シャルマンが明記されているのです。ジャックは「大自然の神」を説き、「文学者になること」を勧められたのです。そして「五月「八月」から十月中旬まで」スイスのレーザンで死闘をし、「十一月十三日の早朝神戸港」に着き帰朝出来たのです。夫人と長女を名古屋に残し、すぐに上京し、麻布のペールの家で『ブルジョア』を書いて十一月末に雑誌へ改造の懸賞小説に応募したのです。東京市外上落合の家に移住し、昭和4(1929)年の年賀状を出したのです。自伝の跋に「若い日とともに死と闘つたジャックとモリスと、ジャンに連絡がついたのは、八十二(83歳?)歳の時だった。」と書いています。そして、生前に自作して芹沢家の墓「芹沢光治良その家族の墓」の墓碑銘に「科学者の畏友ジャックに大自然の法則と神の存在を」と刻【注／一九八二年八十五翁光治良したのです。』
『離愁』に、オートビルのホテル・レジナで共に闘病した三人の戦友には、天才科学者、ジャックらしき人物が登場しない謎を、芹沢光治良記念館の剣持直樹氏に調べてもらつたら、昭和55(2010)年2月から同59(2014)年1月までのモリスとジャンから送られ芹沢家に保管されている11通の手紙には、ジャックのことが全く書かれていないとのこと!!「マダム・セリザワ」や「フランスの偉大な作家ケツセル」のことは書かれているのに、随筆や自伝に明記しているジャック・シャルマンのことが書かれていないことは不思議です。自伝的な闘病を書いた『離愁』は小説ですから、敢えて書かないこともありま。ジャック・シャルマンの名は、モリスから半世紀後に届いた便りの後に、最も大切な人として当然のこととして芹沢光治良は明記しています。随筆や自伝は本当のことを書くものです。架空に想像した人を自筆の墓碑銘に明記するのでしょうか? 晩年の連作には、アランの分身論として架空の「森次郎」が登場し、死去したジャックが実相の世界から現れて芹沢光治良を導きます…。ジャック・シャルマンの確認に、書簡や日記を徹底調査したいものです。【令和5(2023)年7月讞